

<ネッシーのお薦め作品（焚書坑儒リスト）>

## 国内編 1. 柳田国男 「山の人生」

学生時代に読んだ思い出深い作品で、今でもその残響が残っているかのようです。とくにこの作品の中で、彼が役人時代に裁判記録で知った奥美濃山中でおきた父親による子殺し事件を淡々と記した後で、「われわれが空想で造りあげてみる世界よりも、隠れた現実の方がはるかに物ふかい。」と深い感慨を述べている個所に涙が出るほど感動したのを憶えています。

私をして彼の作品の前に跪拝せしむるのは、なによりもその「健康さ」と「精神の方向感覚」の確かさです。

「女の咲顔」という短文のなかの、「かわいいということが、美しさや目鼻立ちや化粧の技術ということとは別個の価値体系として引き継がれてきたのは、我々にとって誠に幸せなことであった。」との洞察は小生の「ブス量不変の法則」(\*1) なんぞ到底及びもつかないものです。

それに比べて、谷崎潤一郎、川端康成、三島由紀夫といった、日本文学の風土病ともいえるべき「源氏物語」かぶれの、病的で変態的な耽美主義者（美的享樂者）ぶりは呆れるばかりです。三島の代表作といわれている「仮面の告白」（オ■マの告白）、「鏡子の家」（■子の家）、「金閣寺」（キン■し）などは、まさに「微細に描かれてはいるが、全体として間違った地図」といえましょう。

「源氏物語」、あのクソツタレと五十四回罵倒しても足りないくらいです。私は「源氏物語」が嫌いというよりは、あんな生臭女坊主や、インチキ美顔術の上顧客である林〇〇子といった連中が語る「源氏物語」が大嫌いなのです。あの不道德な色ごとや、宮中の些末な年中行事の堆積を、日本文学の大遺産と賞讃するのはじつに馬鹿げたことです。いくらソバ好きでも、あんな不味い大盛りソバを五十四杯も食わされたのではたまったものではありません。もういい加減に、「そをいとあはれにおぼほしめしてのそをとは何をさすか」なんて間抜けな問題で、いたいけな高校生男女を悩ませるのはやめにしてほしいのです。

さんざん悪口を言って、死んだ者を生き返らすのもやめておきましょう。

@ネッシー 2012



(\*1：化学反応の前後で質量は変化しない、どんなに化粧しようと××は××。 掲載者注)

(■ベタは掲載者の独断によるものです。ご勘弁。)